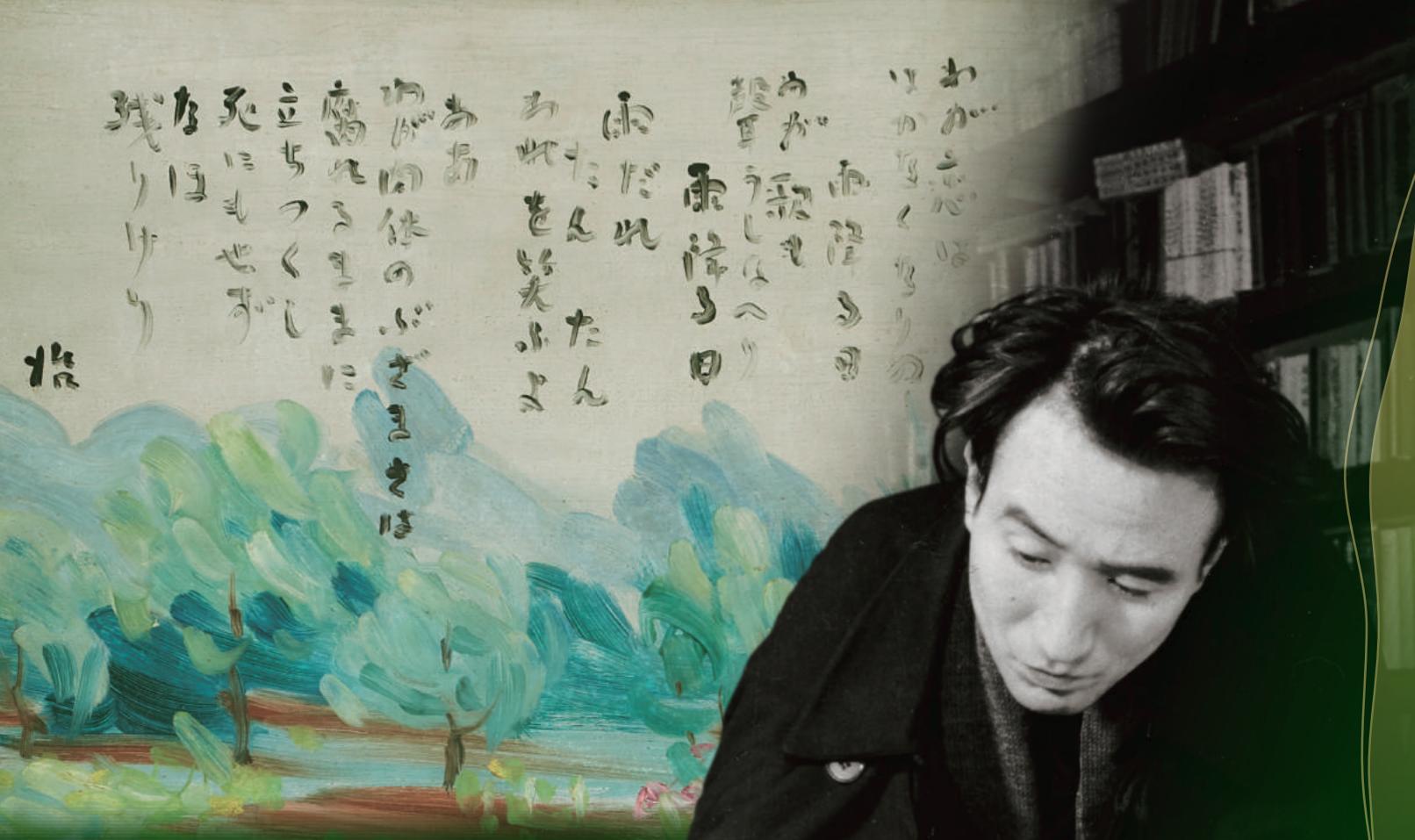


太宰文学と

美術のまじわり

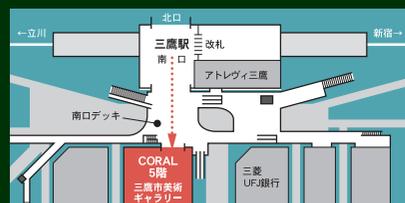


会場 **太宰治展示室**
三鷹の此の小さい家

休館日 ●4月15、22、30日 ●5月1、7~9、13、20、23~31日
●6月3、10、17、24日 ●7月1、8~12、16、22、29日 ●8月5、13日
(月曜定休。祝日の場合は開館し、翌日と翌々日が休館。その他、施設メンテナンスによる臨時休館のため)

会場詳細 三鷹市美術ギャラリー 太宰治展示室 三鷹の此の小さい家 企画展示室
三鷹市下連雀3-35-1 CORAL5階 TEL:0422-79-0033

観覧時間 10時~18時 観覧無料



三鷹市美術ギャラリー 太宰治展示室

撮影：田村茂
©田村茂写真事務所

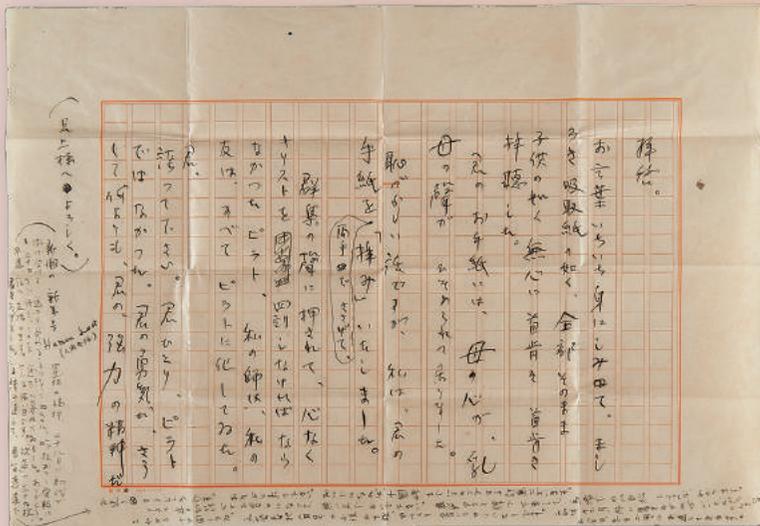
2024
4.13(土) → 8.18(日)

太宰文学と美術のまじわり

太宰治と画家たち

太宰文学には美術をモチーフにした作品が多くあります。近年映画化されるなど、特に若年層から支持を得ている「人間失格」の主人公大庭葉蔵は生計のために漫画を描き、作中にはモディリアーニ、セザンヌ、ゴッホなど西洋絵画の巨匠らの名前も見受けられます。今や「語りの手」と謳われ、日本近代文学の代表的な作家となった太宰治ですが、学生生活を送った青森時代には画業も選択肢の一つとして挙げられたほどの腕前で、主宰した同人誌では、そのほとんどの表紙を自身でデザインしています。

周囲には画家志望の友人も多く、その交際範囲は上京後も広がりました。作家として出立してからは、自身の単行本の表紙画や扉絵を阿部合成に依頼するなど更なる深まりをみせていきます。さらに、義弟の小館善四郎^{ひれさき}は青森で「樽様の画家」の異名を持ち、太宰と小館が疎遠になってからも、太宰を精神面及び経済面においてもサポートしたのが小館と久富で、美知子夫人が「我が家での最も頻繁な来客」と言うほどの友人でした。三鷹の自宅六畳間で繰り広げられたのは「もっぱら文学か美術の話題に限った」と言います。が、両者とも、太宰の死後に至ってもその交流をほとんど口外することはありませんでした。手元で大切に保管していた太宰の油絵や書簡などは、二人が故人となってから公開されました。思い出を胸の内ですべて温めていたことに、太宰への想いの深さが感じられます。



太宰治 小館善四郎宛書簡 昭和11年11月29日（小館家寄託）

小館は太宰に聖書の知識を与えた。ピラトはイエスを処刑した総督として知られる人物。「君、誇ってください。君一人、ピラトでは なかった」と、精神に不安をきたしていたこの時期でも小館に信頼を寄せていることが分かる。



『千代子』昭和16年8月 筑摩書房

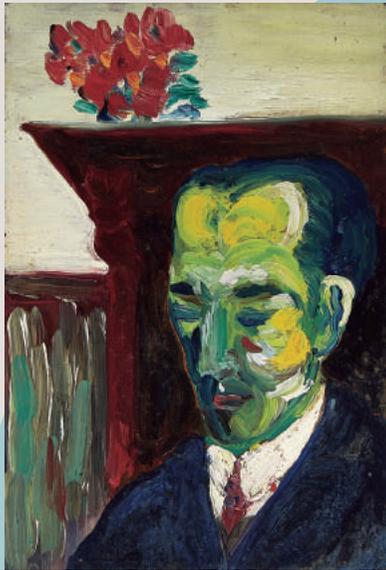
『風の便り』昭和17年4月 利根書房

『女性』昭和17年6月 博文館 装幀:3作すべて阿部合成

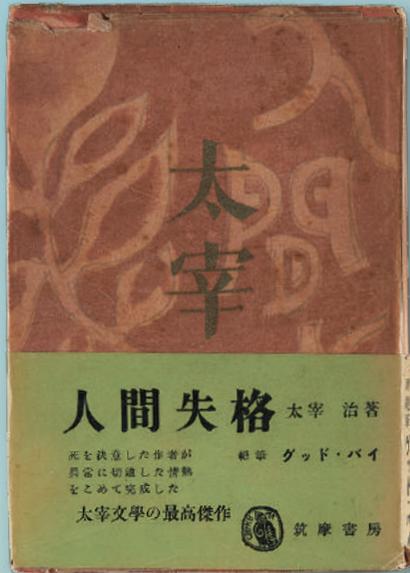
II 太宰文学と美術の融合

太宰の生家である津島家においては一つ年上の三兄が東京美術大学に進学し、美術の道を進んでいます。兄弟間で編んだ同人誌の発案者でもあり、青年期の太宰が文学だけでなく美術にも造詣を深めたのは図らずもこの兄の影響が大きいといえます。遠戚にあたる根市良三も同様の存在といえるでしょう。

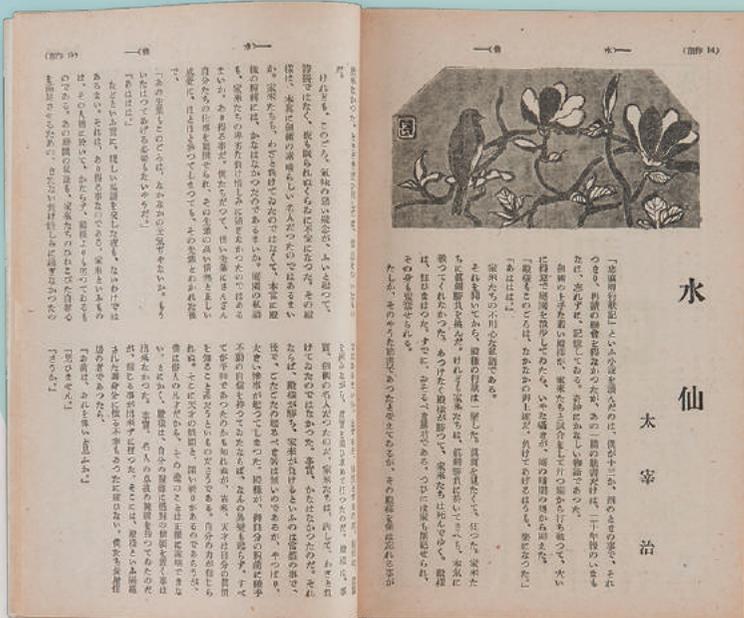
文学作品においては「人間失格」作中でモディリアーニの肖像画を「お化けの絵」と具体的に述べることよって読者の想像力を掻き立てるなどしています。さらには、久富邦夫がモデルの「ある画家の母」(のち「リーズ」)、天性の画才に恵まれながら自信喪失した女性の末路を描いた「水仙」など画家を主人公にした作品も発表しています。一方で、太宰自身は筆の一本も所持せず、鱧崎潤や桜井浜江らのアトリエで描いた油絵13点(2点は共作)が現存しています。借りものの絵筆を用いて独特の色使いとタッチで描かれたこれらの作品から、太宰の美術に対する造詣の深さを実感させられます。



太宰治《鱧崎潤》(鱧崎家寄託)
制作:昭和14、15年頃 油彩・スケッチボード 226×156
鱧崎の没後にアトリエで発見された。



『人間失格』昭和23年7月 筑摩書房
装幀:庫田燧 (鱧崎家寄贈)
作中ではゴッホ、セザンヌなどにも触れ、モディリアーニらの肖像画を主人公大庭葉蔵が「お化けの絵」と言う場面も。太宰と美術といえば一番に思い浮かぶ人気作



「改造」昭和17年5月 改造社
「水仙」初出
物語に出てくる水仙は紙に描かれた水彩画。太宰が実際に鱧崎のアトリエで画いたとされる水仙の絵は、木板上に画かれた油絵(4頁③)

青森県五所川原市芦野公園
にある太宰治文学碑
阿部合成がデザインしたもの
撮影:平成29年(2017)6月19日



本展では、小館善四郎、根市良三、阿部合成、鱧崎潤、久富邦夫らとの交流をとおして、太宰の多彩な芸術性に迫ります。自ら絵筆を執った油絵や画家による装幀の初版本はもちろん、一見平面的に捉えられがちな活字の世界に、美術という視覚を交えて立体的に創出された太宰治の世界をご覧ください。

太宰治展示室 三鷹の此の小さい家

Dazai Osamu Exhibition Room - This Little House of Mitaka

令和2年(2020)12月8日、開設。かつて太宰治が家族と暮らした終の棲家「三鷹村(町)下連雀113」にあった自宅を様々な資料を基に再現しました。

館内では常設展と、太宰の多様な側面に光を当てた企画展示を開催。体験型展示室では、書斎で執筆中の太宰の気持ちになれるかも。三鷹の太宰宅を訪ねるかのような、夢のひと時をお過ごしください。



太宰治文学サロン

Dazai Osamu Literary Salon

平成20年(2008)3月1日、開設。太宰治没後60年と翌年の生誕100年を記念して、太宰が通った酒屋「伊勢元」の跡地に誕生しました。ガイドボランティアの活躍によって、三鷹市内に点在する太宰ゆかりの地の情報拠点となり、今や聖地と言われるまでに親しまれています。

〒181-0013 三鷹市下連雀3-16-14 グランジャルダン三鷹1階

TEL:0422-26-9150

<http://mitaka-sportsandculture.or.jp/dazai/>

■ 開館時間 10時~17時30分

■ 休館日 月曜日・年末年始(12月29日~1月4日)

※ただし、月曜日が休日の場合は開館し、その翌日と翌々日休館

■ 観覧料 無料



太宰治展示室から徒歩約5分の
太宰文学サロンにもお立ち寄りください



①



③



②



④

①小館善四郎《静物画》

製作年不詳 油彩・画用紙 300×420(個人蔵)

画面には太宰治とゆかりの深い青森の地元地方紙「東奥日報」と思しき紙面が見える。小館は上京後も太宰と交流し、久富や鯉崎を太宰に紹介した義弟。

表面・②鯉崎潤画、太宰治賛《「風景」》

昭和14、15年頃 油彩・スケッチボード 230×302(津島家寄託)

鯉崎のアトリエで制作したものの。

③太宰治《水仙》

昭和14、5年頃 油彩・スケッチボード 262×208(津島家寄託)

鯉崎のアトリエで制作したものの。

④太宰治《肖像画》

昭和22年頃 油彩・スケッチボード 226×156(石井立文庫)

晩年の太宰を担当した筑摩書房の編集者 石井立が保管していた、独特の色使いが際立つ肖像画。終戦後、太宰は三鷹駅前の桜井浜江のアトリエに押し掛け、親しい友人たちを即席で描いたが、モデルは不明。

三鷹市が所蔵する太宰治の油絵全作品を公開します。アトリエはおろか絵筆の一本も所持しなかった太宰ですが、現在残っている油絵は友人のアトリエで描いたものです。一枚にじっくりと時間を費やすのではなく、眼前の造形を瞬時に捉える手法が特徴で、特に晩年に制作した肖像画は、心を許す仲間との交流中に即席で描いています。これまで数々の展示会で耳目を集めてきた太宰の静物画、肖像画などの油絵を、義弟の小館善四郎や遠戚の根市良三の版画集などとともにご鑑賞ください。

筆は小説のみならず

太宰治の書画



撮影:田村茂
©田村茂写真事務所